

『英和对訳袖珍辞書』における計量に関する邦訳語の考察

三好 彰

キーワード: 『英和对訳袖珍辞書』 『和蘭字彙』 対訳辞書と計量関係語

要旨

日本で最初に市販された英和辞書は文久2(西暦 1862)年に初版が刊行された『英和对訳袖珍辞書』である。その見出し語(英単語)はオランダで刊行された Picard & Maatjes (1857) という英蘭辞書に拠っている。それゆえ『英和对訳袖珍辞書』で英語の見出し語に対して Picard & Maatjes (1857) からオランダ語訳を得て、幕末に利用できた蘭和辞書を引いて邦訳を得たのだというのが通説である。

英語、オランダ語そして日本語という3つの言語はそれぞれに特有の性質を有するので、単純な言葉の置き換えでは済まないのではないかというのが素朴な疑問であった。

このことを計量(量目、重量、尺度)に関係する語を取上げて具体的に検証した。計量法は諸国で独自に作り上げられた歴史がある。特に我が国には欧米とは異なる尺貫法がある。

また英語とオランダ語は西ゲルマン語に属している関係で単語に近縁のものがあるが、その意味に微妙な差がある。計量関係の語においてはその差は小さくても実用上問題になる。

『英和对訳袖珍辞書』の第2版は慶応2(西暦 1866)年に出たが、これらの問題を踏まえて計量関係の語が改訂されており問題の認識が深まっている。決して単純な言葉の置き換えでは無かった。

1. はじめに

市販された最初の英和辞書は文久2(西暦 1862)年に刊行された『英和对訳袖珍辞書』の初版(堀達之助編 1862)である。その見出し語は Picard & Maatjes (1857) というオランダで編纂された英蘭・蘭英辞書の英蘭部に拠っている(岩崎克己 1935:52)。つまりオランダ人が英語を使うための英蘭辞書が『英和对訳袖珍辞書』の底本である。

英蘭対訳辞書をもとにして作られた『英和对訳袖珍辞書』に3つの言語(英語、オランダ語、日本語)に絡む問題がある。これらの関係諸国の計量(量目、重量、尺度)に関係する語を取上げて、3つの言語に絡む問題点を具体的に明らかにするのが本稿の目的である。

2. 『英和对訳袖珍辞書』と関連辞書

考察を始めるに当たり、日本とオランダに於ける英語に対する受容状況が述べられている『英和对訳袖珍辞書』と Picard & Maatjes (1857) の序文を概観する。

(a) 『英和对訳袖珍辞書』の初版（堀達之助編 1862）の序文

堀達之助編（1862）の序文 PREFACE は英文で次のように書かれている。

As the study of the English language is now rapidly becoming general in our country we have had for sometime the desire to publish a “Pocket Dictionary of the English and Japanese languages as an assistance to our scholars.

In the meantime we received an order to prepare such a Dictionary as soon as possible having in view how indispensable is the knowledge of a language so universally spoken to become rightly and fully acquainted with the manners, customs and relations of different parts of the world and its daily important occurrences and changes.

The teachers of the School of European languages --- Messrs. NICI SUESKAY, TIMRA GORO, TAKAHARA YUSHIRO, MITSUKURI TEITSIRO, etc. have most cordially lent us their valuable aid and have done all in their power to promote the object of this work.

It is our hearty wish that this work, however imperfect, may tend to assist those who may favor it with their attention and that the words which prove most useful in daily practice may be noted and any faults indicated in order that we may have every facility for improving the next edition.

Yedo

November 1862

HORI TATSUNOSKAY

この序文の日付は 1862 年 11 月（文久 2 年）である。アメリカとの間で日米和親条約を締結して 2 世紀半に及んだいわゆる鎖国政策を解いて開国した嘉永 7（西暦 1854）年から 8 年後のことである。そしてアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスの五か国と修好通商条約を締結して貿易を開始した安政 5（西暦 1858）年から 4 年後である。

開国するまでに蘭学を学んでいたので世界に目を閉ざしていたわけでは無かったが、アメリカの黒船が与えた衝撃は大きく蘭学から英学へと軸足を变えて英語を学ぶことが急速に広まった。それゆえ英学徒のためにポケット型¹の英和辞書を作りたかったと書き始めている。この辞書で諸国の流儀や慣習それに国家間関係などが分かるようにしたいと続けている。

最後に誤謬があれば次の版で直すから連絡して欲しいと書いており、英語で書かれたこの序文を読むことができる英学徒が育っていたわけである²。

(b) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の（堀越亀之助編 1862）の序文

堀越亀之助編（1866）に堀達之助編（1862）の改訂第 2 版であり、上記の堀達之助編（1862）の序文が転記されており、それに続いて堀越亀之助による序文 PREFACE FOR THE SECOND

¹ 現存する堀達之助編（1862）は枕辞書と別称されるように枕になる大きさであるが、慶応 3（西暦 1867）年に刊行された改正増補版には極く薄い和紙に刷り上げた羽織の袖に入る袖珍サイズのものがある（三好彰 2010）。

² 英学徒が育っていた傍証になるが、民間の書誌である老皂館が文久元年に『英吉利文範』初編を刊行した。本書は欧米で広く利用された Lindley Murray の上級者向けの英文法書を英文のまま翻刻したものである（三好彰 2013）。

EDITION が次のように書かれている。

The first edition of this work, published in the second year of the Nengo Bunkiuw, being entirely sold out, I was ordered to revise and correct it for a second edition.

But every thing being done very precipitately and hastily, it left me no sufficient time, but to correct some considerable typographical errors and mistakes in the translation and to add two tables, showing the conjugation of the irregular verbs and explaining the signs and abbreviations mostly used.

At same time I fully understood, that the Japanese and Chinese names of Plants, Animals and Minerals and the reduction of Measures, Weights and Species, in which there were a good many errors, ought to be corrected. I have done so with the kind assistance of my learned friends YANAGAWA SUNSAM, TANAKA YOSIWO & others for which I must express them my warmest thanks.

Notwithstanding all this there will be found a good many faults as yet, and I request, that he who may find any will be so kind as to indicate them to me.

YEDO, January, 1866.

HORIKOSI KAMENOSKAY

本稿で論ずる Measure と Weight (計量、すなわち量目、重量および尺度) に関する邦訳語は柳川春三等の支援を受けて改訂したと述べている。

(c) Picard & Maatjes (1857) の序文

Picard & Maatjes (1857) は Picard (1843) の改訂第 2 版であるが Picard (1843) の序文 Voorberigt が引用されて次のように書かれている³。

Sedert de Engelsche taal meer algemeen in ons land beoefend wordt, is men bedacht geweest, om in de behoefte aan goede woordenboeken te voorzien. Hoe voortreffelijk deze ook mogen wezen, zij zijn, uit hoofde der uitgebreidheid, kostbaarheid of uit den aard der samenstelling, minder geschikt, om jeugdigen kinderen in handen gegeven te worden. Er ontbrak dus nog altijd een woordenboek, dat met beknoptheid en onkostbaarheid, meerdere bruikbaarheid voor de scholen paarde. De Uitgevers, op die behoefte opmerkzaam gemaakt, hebben mij de samenstelling van een dusdadjig woordenboek toevertrouwd; in hoe verre ik dat doel bereikt heb, laat ik aan de beoordeeling van deskundigen over. Mogt ik evenwel in het vervolg de overtuiging erlangen, iets te hebben bijgedragen, om der jeugd de beoefening eener taal gemakkelijk te maken, waarin de onschatbaarste werken van kunst en wetenschap geschreven zijn, dan zou ik den tijd, dien ik aan dit werk besteed heb, met genoegen herdenken.

H. PICARD

Gorinchen,

³ Picard の序文の中で、goede は goed の誤植、hoofde は hoofd の誤植と見なせる。詳細は省くが Picard (1843) と Picard & Maatjes (1857) の本文にも誤植があることを指摘しておく。

Februarij 1843

オランダ語で書かれているこの文を以下に試訳する、なお本稿ではオランダ語の試訳を【 】で示す。

【英語が我が国に普及し良い辞書が作られるようになった。しかし語彙が多く値段が高いしその構成法も児童向けでは無い。つまり初等教育用の簡便で安価な辞書がまだ無い。そういう辞書を作るようにと出版社から声がかかった。芸術や科学のことに腐心したのだが英語を学ぶ若者に便利なものだとの評が得られれば喜ばしい。】

念のためだが冒頭にある「我が国」とはオランダのことである。なお H. (Hendricus) Picard はオランダ南部の町 Gorinchen (ホリンヘン) で私塾を経営した初等教育者であった(三好彰 2008)。

これに続いて A. B. Maartjes による数行だけの簡単な序文 VOORBERIGT VOOR DEN TWEEDEN DRUK 【第2版のための前書き】があるが、ここでは省略する。

Picard & Maartjes (1857) はオランダで英語を学び始める生徒のための辞書であるから、このように序文はオランダ語で書かれている。

(d) 『英和对訳袖珍辞書』と蘭和辞書『和蘭字彙』

『英和对訳袖珍辞書』の初版(堀達之助編(1862))の見出し語が英蘭・蘭英辞書 Picard & Maartjes (1857) に拠っているので、そのオランダ語訳を幕末に編纂された蘭和辞書『和蘭字彙』(桂川甫周編 1858)で引いて邦訳を得て堀達之助編(1862)を作り上げたというのが通説である。本稿では量目・重量・尺度に関連する邦訳語でこの通説を検証する。

さて桂川甫周編(1858)はオランダ商館長ズーフ Hendrik Doeff が文化13(西暦1816)年に編纂したものを安政年間に幕府奥医師の桂川甫周編が校訂して刊行した蘭和辞書であり、その底本はハルマ François Halma の蘭仏辞書 Halma (1729)である(松田清 1984)。

Halma (1729) はオランダ語の見出し語に対して、オランダ語による解説と対応するフランス語の意味が書かれている。一例として「比較する」を意味するオランダ語 *Vergelijken* を挙げると次のようである。

Vergelijken, w. w., Tegen iets gelijken. Comparer, faire comparaison, mettre en parallele

ここで *w. w.* は他動詞のオランダ語の略号である。“*Tegen iets gelijken.*”【他と類似する】は見出し語 *Vergelijken* をオランダ語で言い直したものであり、これに続けてフランス語で“*Comparer, faire comparaison, mettre en parallele*”と書かれている。このように Halma (1729) は蘭・蘭仏辞書である。19世紀初頭から長崎のオランダ通詞がフランス語を学び始めていた(古賀十二郎 1947:10)が、その人達に便利な辞書であった。以下では“*Tegen iets gelijken.*”のように見出し語をオランダ語で言い直した表現をオランダ語解説と呼ぶ。

3. 『英和对訳袖珍辞書』における計量に関する邦訳の考察

『英和对訳袖珍辞書』の初版である堀達之助編(1862)、再版である堀越亀之助編(1866)に

は特定の計量（量目・重量・尺度）を意味する英語の見出し語（英単語）が管見で 47 語ある。

この英語の見出し語と底本である Picard & Maatjes (1857) の対応するオランダ語訳との関係を論ずるが、1 つの英語の見出し語に対してオランダ語訳の数は 1 つとは限らない。つまり英語対オランダ語訳は必ずしも 1:1 に対応していない。

1:1 に対応しないケースはある英単語が複数のオランダ語訳に対応する。つまりオランダ語から見て多義な英単語である。そしてそのオランダ語訳が日本語から見て多義なことがあり、英単語に該当する日本語をオランダ語訳から一意的に選び出すことができないことが起こり得る。邦訳とオランダ語訳との関係を考察する上で、選択の曖昧さを避けるために本稿では Picard & Maatjes (1857) が英語の見出し語に対してオランダ語訳を 1 つ与えているケース、つまり英語とそのオランダ語訳が 1:1 に対応している計量に関する語を最初に論ずる、後述のように 22 語が該当する。

残りの 25 語に付いてはオランダ語訳との関係は不問とし、堀達之助編 (1862) から堀越亀之助編 (1866) への改訂状況について概観する。

3.1 英語対オランダ語訳が 1:1 に対応する計量関係語の考察

本節では英語対オランダ語訳が 1:1 に対応する語について逐一検討する。次の 22 語が該当する。

量目に関する英単語は次の 9 語

Avoirdupois, Bushel, Carat, Coomb, Gallon, Hogshead, Pint, Quarter, Terce

重量に関する英単語は次の 5 語

Hundred-weight, Kilogram, Pennyweight, Troy-weight, Wey

尺度に関する英単語は次の 8 語

Barleycorn, Decempedal, Ell, Furlong, Gry, Inch, Mile, Rood

堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) が量目・重量・尺度と見なしているこれらの 22 語の邦訳について、底本である Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳と幕末に刊行された蘭和辞書である桂川甫周編 (1858) における当該オランダ語訳の邦訳との関係を論ずる。

なお必要に応じて *instituut voor de Nederlandse taal* 【オランダ言語研究所】がインターネットで公開している *Historische woordenboeken op internet* (以下では『オランダ古語辞書』と略称する) と英語辞書として堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) の編纂時に利用できた可能性がある Webster 辞書の一例として 1858 年版 (Webster 1858) を参照する、また古英語の記事が豊富な 2009 年版の英語辞書 *Oxford English Dictionary* (以下では OED (2009) と略称) を適宜参照する。

3.1.1 量目に関する邦訳の検証

量目に関する 9 つの英単語の邦訳を逐一検証する。

(a) Avoirdupois

英単語 *Avoirdupois* の堀達之助編 (1862) の邦訳は「平常通用ノ量目」であり、堀越亀之助編 (1866) は「平常通用ノ量目 其一「ポンド」ハ我百廿四強」と改訂している。この註「其一「ポンド」ハ

我百廿勿強」は現在の常衡ポンドに相当している。日本の計量法に換算しており内容を理解していたことが分かる。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は *gewoon gewigt, n.* 【重さ】である (n. は中性名詞の略号) が、Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に見当たらない。

Webster (1858) と OED (2009) に *Avoirdupois* は見当たらないが、綴りが少し異なる *Avoirdupois weight* がある、これは常衡と訳されるポンドを基準とした質量の単位である。

(b) Bushel

英単語 *Bushel* の堀達之助編 (1862) の邦訳は「升目ノ名、大ナル量」と2語であるが、堀越亀之助編 (1866) は「升目ノ名 八「ガルロル」ニテ凡我一斗八升許」と1語に改訂している。この註「八「ガルロル」ニテ凡我一斗八升許」は現代流に読み替えると「8 ガロンであってわが国のほぼ一斗八升到当たる」である。

OED (2009) と Webster (1858) はともに *Bushel* を 8 gallons としているが、Gallon はイギリスでは約 4.546 リットルであり、アメリカでは約 3.785 リットルであって差がある。

なお堀越亀之助編 (1866) は Gallon の 8 倍として約一斗八升だとしているが、一斗八升は約 32.470 リットルなのでイギリス流ともアメリカ流とも違っている。

さて Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は *schepel, n.* である。Halma (1729) は見出し語 *schepel* にオランダ語解説 *Het vierde deel van een mudde* 【*mudde* の4分の1】を付しており、桂川甫周編 (1858) はそれを「升目ノ名 一ト「ミユデ」四分ノ一ナリ」と邦訳している。この註にある「ミユデ」は 100 リットルを意味するオランダ語 *mudde* のことなので、その 1/4 は 25 リットルであるが、イギリスの 8 ガロン = 36.368 リットル、アメリカの 8 ガロン = 30.280 リットルとも違っている。

オランダ語 *schepel* は英単語 *bushel* と量が異なるので、Picard & Maatjes (1857) が同義としていることに疑問がある。このままならオランダがイギリスやアメリカと貿易する上で混乱が生ずる。

(c) Carat

英単語 *Carat* の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「金及宝石ノ量目」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は *karaat, n.* であるが、Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) の見出し語に無い。

『オランダ古語辞書』では次のようである。

- A. In den juweelenhandel. De naam van de gewichtseenheid (1/1200 van het mark Trooisch) welke bij het wegen van diamanten en andere edelgesteenten en van paarlen wordt gebruikt. Verg. de samenst. juweelenkaraat. 【フランスの町 Trooy で使われていた重さの単位の 1200 分の 1。ダイヤモンドや真珠などの貴金属の重さに使用】
- B. Tot of bij het bepalen van de waarde, of van het gehalte van goud. 【金の価値、純度】

これで貴金属や真珠を測る単位だと分かる。

OED (2009) にはその単位の意味で次のように出ている。

A measure of weight used for diamonds and other precious stones, originally 1/144 of an ounce, or 31/3 grains, but now equal to about 1/150 of an ounce troy, or 31/5 grains, though varying slightly with time and place.

時代と場所で目方は異なるとしている。堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳が、どこまで理解できていたのかは「金及宝石ノ量目」という表現からは読み取れない。

(d) Coomb

英単語 Coomb の堀達之助編 (1862) の邦訳は「升目ノ名」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「升目ノ名 四「ビュセル」ニシテ凡我七斗二升許」と改訂している。この註にある「ビュセル」は上記の Bushel であり、Webster (1858) が “A dry measure of four bushels, or half a quarter” としているのに符合する。

堀越亀之助編 (1866) の註にある「凡我七斗二升許」はほぼ 129.88 リットルにあたるが、堀越亀之助編 (1866) の Bushel = 32.470 の 4 倍 = 129.88 なので同じように考えているのが分かる。

さて Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は maat van 145 kan, f. (f. は女性名詞の略号) であり、オランダ語 kan はリットルのことなので 145 リットルとなり邦訳と差があり、また Bushel の場合と同じようにイギリス英語とアメリカ英語との差もある。

なお Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に maat van 145 kan の表現が見当たらない。

(e) Gallon

英単語 Gallon の堀達之助編 (1862) の邦訳は「尺度ノ名」と長さの単位だとしているが、堀越亀之助編 (1866) は「升ノ名 我二升五合ニアタル」と改訂しているので量目の項で論ずる。註の「我二升五合ニアタル」はほぼ 4.600 リットルである。

Bushel で述べたように、Gallon はイギリスでは約 4.546 リットルでありアメリカでは約 3.785 リットルであって差がある。堀越亀之助編 (1866) の邦訳「升ノ名 我二升五合ニアタル」はイギリスの Gallon に近い。

さて Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は maat van 4,5 kan なので【4.5 リットル】となり、イギリスの Gallon に近いがわずかな差がある。

なお Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に maat van 4,5 kan の表現が見当たらない。

(f) Hogshead

英単語 Hogshead の堀達之助編 (1862) の邦訳は「量目ノ名」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「量目ノ名 五十二「ガロン」半ヲ云、大桶」と改訂している。註の「五十二「ガロン」半」はイギリス英語では 238.665 リットル、アメリカ英語なら 198.7125 リットルである。

Webster (1858) では次の通りである。

An English measure of capacity, containing 63 wine gallop, or about 52 ½ imperial gallons; a half-pipe. The old ale hogshead contained 54 ale gallons, or nearly 55 imperial gallons と A large cask, of indefinite contents, but usually containing from 100 to 140 gallons.

堀越亀之助編 (1866) の邦訳は、Webster (1858) と合っている。

さて Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は okshoofd, n. であり、対応する桂川甫周編

(1858) の邦訳は「「ウエキン」桶 但一斛三斗一升容ルヲ云」であって量目ではなく「ウエキン」つまりワインを入れる容量「一斛三斗一升」の樽である。一斛三斗一升は約 236.3109 リットルに相当する。

なお Halma (1729) のオランダ語解説は *Zeker wijnvat* なので桂川甫周編 (1858) の「「ウエキン」桶」に該当するが注釈「但一斛三斗一升容ルヲ云」に相当する表現は無いからこの注釈は桂川甫周編 (1858) の編纂者が付け加えたのが分かる。

『オランダ古語辞書』で *okshoofd* は次の通りである。

1. Oude — maar nog heden in den handel gebruikelijke — vochtmaat, inzonderheid voor wijn, bier en brandewijn; het vierde deel van een vat, houdende 6 ankers (gemiddeld 220 liters); mv. okshoofden en okshoofd, het laatste bij een bepaald telwoord (of bij zooveel en hoeveel, die een bepaald aantal onderstellen), wanneer de gansche hoeveelheid als een geheel beschouwd wordt. 【昔から使われてきたワイン、ビール、ブランデーなどの容量の単位で 6 ankers、つまり 220 リットル】
2. Houten vat of ton, houdende ongeveer een okshoofd of 6 ankers, vooral van wijnvaten gebruikelijk; mv. okshoofden. 【6 ankers 入る木製の樽】

量目として 220 リットルと、その量の入るワイン樽の両義がある。

Hogshead の場合もオランダ、イギリス、アメリカ、日本でリットル量に差がある。

(g) Pint

英単語 *Pint* の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「升目ノ名」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は英語と綴りが同じで *pint, f.* であり、桂川甫周編 (1858) の邦訳は「升目ノ名」である。Halma (1729) の *pint* のオランダ語解説は *Zekere maar* (ある計量法の意味) に拠ると見られるが、「升目ノ名」では量目の規模が不明である。

なお英語 *Pint* の発音は IPA(International Phonetic Alphabet) 表記で *paɪnt* であり仮名で書くとパイントである。そして同じ綴りのオランダ語 *pint* の発音は IPA 表記で *pɪnt* であって、仮名で書くとピントなので *Quarter* の邦訳中の「ピント」はオランダ語に拠っている。

ところでオランダの *pint* は 0.568 リットルである。英語 *Pint* はイギリスではオランダ語と同じで 0.568 リットルである。アメリカでは液量単位としては 0.568 リットルで同じだが、乾量単位では 0.473 リットルであってオランダ、イギリスと違っている。堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) が

(h) Quarter

英単語 *Quarter* の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「「ピント」ノ四分一 量目」である。上述の *Pint* と同じように量目の大きさが書かれていないので理解の程度が読み切れない。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は *een vierde pint, f.* 【*pint* の 1/4】であるが、桂川甫周編 (1858) に見当たらない。

なお *Quarter* は乾量単位であり、アメリカとオランダ、イギリスで違いがあることを *Pint* の

項で述べた。このことを堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) が認識していたかどうかは不明である。

(i) Terce

英単語 Terce の堀達之助編 (1862) の邦訳は「升目ノ名 「ビュット」の三分ノナリ」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「升目ノ名 四十二「ガルロン」 即チ我一石余ニ当ル」と改訂している。

OED (200) の見出し語に Terce は無いのでイギリスでは使われないようだが、Webster (1858) には有って次の大きさの樽 cask だとしている。

A cask whose contents are 42 gallons, the third of a pipe or butt.

堀達之助編 (1862) の註「ビュット」の三分ノナリは the third of butt のことであり、堀越亀之助編 (1866) の註「四十二「ガルロン」」は 42 gallons のことであって Webster (1858) に両方の表現が見られる。つまり表現は異なるが意味は同じである。アメリカの Gallon は 3.785 リットルなので、その 42 倍は 158.97 リットルとなる。

堀越亀之助編 (1866) の註に「我一石余ニ当ル」とあるが、現行の新京杓の 1 石は 6.4827 立方尺で約 180 リットルに相当し、Webster (1858) の定義に合っていないので典拠は不明である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は derde, n. 【3 分の 1】であり、Halma (1729) および桂川甫周編 (1858) の見出し語に無い。

3. 1. 2 重量に関する邦訳の考察

重量に関する 5 つの英単語の邦訳を逐一検証する。

(a) Hundred-weight

英単語 Hundred-weight の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「百「ポンド」或ハ百十二「ポンド」ノ量目ノ名」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は centenaar, n. であり、Halma (1729) および桂川甫周編 (1858) の見出し語に無いが、『オランダ古語辞書』にはあって次のようである。

Een gewicht van honderd ponden, de zwaarte verschilt dus naar gelang van die der bedoelde ponden; thans een gewicht van honderd kilogram. 【重さの単位で 100 ポンド。準拠するポンドで変わる、今では 100 キログラム】

Webster (1857) の見出し語に無いが、OED (2009) には有って次のようである。

An avoirdupois weight equal to 112 pounds; prob. Originally to a hundred pounds, whence the name. Abbreviated cwt. (formerly C.) Locally it has varied from 100 to 120 lb.; in the United States a hundredweight is now commonly understood as 100 pounds.

堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳「百「ポンド」或ハ百十二「ポンド」ノ量目ノ名」は OED (2009) の解説に合っている。

(b) Kilogram

英単語 Kilogram の堀達之助編 (1862) の邦訳は「量目ノ名」であるが、堀越亀之助編 (1866)

は「量目ノ名 二封度ト二零六二等シ」と改訂している。註「二封度ト二零六二等シ」は現在流だと「2.2062ポンド」になり、常衡ポンドは453.5gなので1,000.7gとなりほぼ妥当な邦訳である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は Ned. Pond, n. である。Ned. Pond はオランダの pond のことで現代では500gであるが、『オランダ古語辞書』では次のようである。

Naam voor een gewichtseenheid die naar tijd en plaats zeer verschilt, doch altijd en overall verdeeld is in een grooter of kleiner aantal onsen. 【重さの単位だが場所と時代で異なるが ons 程度である】

それゆえ Kilogram のオランダ語訳として Ned. Pond, n. でよいかどうかに疑問がある。

ともかく堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) がオランダ語訳 Ned. Pond に拠っていないことは確かである。

(c) Pennyweight

英単語 Pennyweight の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「量目ノ名 二十四「ゲレイン」ニ当ル」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は gewigt van 1,5 wigdje, n. である。これは24 grains と同義の「1.5グラム」を意味するが Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に見当たらない。

Webster (1857) では次のようである。

A troy weight containing twenty four grains, or the twentieth part of an ounce.

堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳は grain を「ゲレイン」と読んでいて Webster (1857) の解説に沿っている。つまり Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳に拠っていない。

(d) Troy-weight

英単語 Troy-weight の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「金銀ナドヲ秤ル量目」である。

Webster (1858) では次のようである。

The weight by which gold and silver, jewels, medicines, &c., are weighed.

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は goudgewicht, n. である。桂川甫周編 (1858) は goudgewicht を「金ヲ掛ル天秤」と訳しているが、goudgewicht は goud と gewigt の合成語であり goud は「金」で、gewicht は「重さ」なので「天秤」は適訳では無い。

堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) は Webster (1858) の解説に合っており適訳である。

(e) Wey

英単語 Wey の堀達之助編 (1862) の邦訳は「秤量ノ名」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「秤量ノ名 秤ルモノニヨリテ同カラズ或ハ百八十斤或ハ二百斤」と注釈を付し改訂している。

Webster (1858) は次の通りである。

A certain quantity. In England, a weigh of wool is 6 ¼ tods, or 182 lbs.; a weigh of butter or

cheese varies from 2 to 3 cwt.,: a weigh of corn or salt is 40 bushels; a weigh of oats or barley, 48 bushels, &c.

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は 180 schepels, n. 【180 升】であるが、この表現は Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に見当たらない。

堀越亀之助編 (1866) の邦訳の註「秤ルモノニヨリテ同カラズ或ハ百八十斤或ハ二百斤」の典拠は不明であるが、バターや塩など物によって単位が異なることが理解できており、決め打ちしている Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳より好ましい。

3.1.3 尺度に関する邦訳の考察

尺度に関する 8 つの英単語の邦訳を逐一検証する。

(a) Barleycorn

英単語 Barleycorn は堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「大麦ノ粒、尺度ノ名」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は gerstekorrel, m. (m. は男性名詞の略号) であるが、Halma (1729) の見出し語に無く、桂川甫周編 (1858) にも無い。『オランダ古語辞書』では gerstekorrel に「大麦の粒」が出ているが尺度の意味は見当たらない。

Webster (1858) では次の通りである。

A grain of barley, about the third part of an inch in length.

尺度として 1/3 インチだとしている。堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) の典拠が何かは不明である、今後の課題とする。

(b) Decempedal

英単語 Decempedal は本稿で取り上げる唯一つの形容詞である。堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「十「フート」ノ長サアル」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は tienvoetig であるが、Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) の見出し語に無いものの tien (十) と voetig (フィートの) の合成語なので意味は分かる。Webster (1858) は “Ten feet in length” なので読んで字の如しである。どちらからも堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) の邦訳が得られる。

(c) Ell

英単語 Ell の堀達之助編 (1862) の邦訳は「尺度ノ名 念仏尺ニテ凡三尺三寸八分八厘九弗弱ライフ」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「尺度ノ名 (仏) 我四尺二寸九ト (蘭) 我三尺三寸 (英) 我四尺〇九ト」と注釈部を改訂している。

堀達之助編 (1862) の邦訳の註「念仏尺ニテ凡三尺三寸八分八厘九弗弱ライフ」をメートルに換算すると約 1.054m である。

堀越亀之助編 (1866) の邦訳の註「(仏) 我四尺二寸九ト (蘭) 我三尺三寸 (英) 我四尺〇九ト」にあるように国によって Ell の長さが違うが、この註をメートル法に換算するとフランスで約 1.3 メートル、オランダで約 1 メートル、イギリスで約 1.24 メートルとなる。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は el, f. である。Halma (1729) の el のオランダ語解説は “Elle; zekere meetstok” (ある尺度の意味) であるが、桂川甫周編 (1858) は「エル 尺度ナリ 念仏尺ニテ凡三尺三寸八分八厘九佛弱ニ當ル」であって日本の念仏尺の長さに換算しており、それは堀達之助編 (1862) の邦訳の註と同義である。

Webster (1858) では次のようである。

A measure, of different lengths in different countries, used chiefly for measuring cloth. The English ell is 45 inches; the Flemish elle, 27; the Scotch, 37.2; the French, 54.

Ell は諸国で差があるとしてインチで示しているが、これをメートルに換算するとフランスは約 1.4 メートル、オランダは 0.69 メートル⁴、イギリスは 1.14 メートルとなる。

『オランダ古語辞書』では次の通りである。

Lengteëenheid. waarvoor de menschelijke onderarm den grondslag vormt. Vroeger kende men verschillende plaatselijke eenheden als: de Amsterdamsche el ter lengte van 688 mM., de Haagsche el van 694 mM., de Delftsche el van 683 m.M. en de Brugsche el van 701 m.M.

Thans wordt de el zoo goed als uitsluitend in den manufacturenhandel gebruikt en gerekend op 69 c.M. 【昔はオランダ国内でも地方によって違っていて、アムステルダムでは 688 mm、ハーグでは 694mm、デルフトでは 683m、ブリュージュでは 701mm だった。】

堀越亀之助編 (1866) は国によって長さが異なることの理解が出来ている点で堀達之助編 (1862) に比べて理解が進んでいるが、その典拠が確定できないので今後の課題とする。

(d) Furlong

英単語 Furlong の堀達之助編 (1862) の邦訳は「尺度ノ名」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「尺度ノ名 英一厘ノ八分一」と注釈部を付け加えている。

Webster (1858) 次のようである。

A measure of length; the eighth part of a mile; forty rods, poles, or perches.

堀越亀之助編 (1866) の邦訳の註「英一厘ノ八分一」は、これを受けた表現になっている。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は maat van 200 N. Ellen である。つまりオランダ語 El の 200 倍というので 200 メートル強となり、8 分の 1 マイルの Furlong とほぼ同じ長さになるが堀達之助編 (1862) はこれを取っていない、その典拠は不明である。

なお Halma (1729) と桂川甫周編 (1858) に maat van 200 N. Ellen は見当たらない。

(e) Gry

英単語 Gry の堀達之助編 (1862) の邦訳は「何モナイ」であって計量に関する邦訳はないが、堀越亀之助編 (1866) は「何モナキヲ、空ナルヲ、尺度 - 「ライン」千分一、些小」と改訂していて尺度に関する邦訳が加わっている。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は niets, n. である。これによつたと考えられるが桂川甫周編 (1858) では「無」であり尺度の意味は無いし『オランダ古語辞書』にも尺度の意味は無い。

⁴ Webster (1858) はオランダの例を Flemish で示しているが、オランダ内で el の地方差が次のようにある。
アムステルダム=68.8cm、ブリュージュ=69.2cm、ハーグ=69.4cm

Webster (1858) では次のように尺度の意味がある。

1. A measure equivalent to one tenth of a line. Locke.
2. Anything very small, or little value.[Rare.]

OED (2009) では Obsolete だとしているが次のように尺度の意味がある。

The smallest unit in Locke's proposed decimal system of linear measurement, being the tenth of a line, the hundredth of an inch, and the thousandth of a ('philosophical') foot.

堀達之助編 (1862) の計量に関する邦訳が無いこのケースに堀越亀之助編 (1866) が計量の意味を付加していることから、計量に関する語の改訂に携わった柳川春三等は堀達之助編 (1862) が計量関係の語と見なしていない見出し語にも目を通していたのが分かる。

(f) Inch

英単語 Inch の堀達之助編 (1862) の邦訳は「尺ノ名 我ガ八分許ニ当ル」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「尺ノ名 我ガ八分四厘許ニ当ル」と改訂している。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は duim, m. であるが、duim はフランス語から見て多義なので Halma (1729) に複数のオランダ語解説があるが尺度としては Zekere maat は【ある尺度】の意味である。桂川甫周編 (1858) は日本の寸法に換算して「尺ノ名 凡八歩五厘」と詳しい値を示している。

註を比較すると堀達之助編 (1862) は「我ガ八分許ニ当ル」、堀越亀之助編 (1866) は「我ガ八分四厘許ニ当ル」、そして桂川甫周編 (1858) は「凡八歩五厘」でありわずかな違いがある。1 インチは 8.38200 分なので堀越亀之助編 (1866) の邦訳が一番近い。

(g) Mile

英単語 Mile の堀達之助編 (1862) の邦訳は「里法」であるが、堀越亀之助編 (1866) は「一里 我十四町四十間許」と改訂している。この註「我十四町四十間許」は 1.6 キロメートルであり、ほぼ 1 マイルである。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は mijl, f. であり、桂川甫周編 (1858) では「里法」であって長さを示していない。

『オランダ古語辞書』では次の通りである。

Eigenlijk. Naam van eene lengtemaat, thans gelijkgesteld met kilometer, voorzoover mijl daardoor nog niet is vervangen. Vroeger bedroeg eene Hollandsche mijl 5600 el; vaak ook werd mijl toegepast op elders gebruikelijke en van de Hollandsche mijl verschillende lengtematen, als b.v. Engelsche, Fransche, Duitsche (of geographische) mijlen (de laatstgenoemde worden gesteld op 1/15 graad van een grooten cirkel op de aarde) 【長さの尺度であり現在ではキロメートルだが、往時オランダではオランダでは昔 5600 el (註: 約 5600 メートル) だった。イギリス、フランス、ドイツではマイルだが、これは地球の円周の 15 分の 1 度分によっており、オランダの 5600el と違っている。】

Webster (1864) では次の通りである。

A measure of length or distance. The English or statute rule contains of 8 furlongs, 320 rods,

poles or perches, 1760 yards, 5280 feet, or 80 chains. The Roman mile was a thousand paces, equal to 1600 yards English measure.

このようにイギリスとオランダでマイルの長さが違っているが、堀越亀之助編 (1866)はイギリス流儀に拠っている。

(h) Rood

英単語 Rood の堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳はともに「尺度ノ名 英国ノ十六尺半ニ当ル」である。

Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳は roede, f. であるが、roede は多義であり Halma (1729) に複数のオランダ語解説がある。桂川甫周編 (1858) の邦訳と併記すると次のようである。

Roede, z.v. geeselroede	罪人杯ヲ敲ク鞭
Roede, spitsroede	気條 梅杯ノ
Roede, maat van twaalf Rijnlandsche voeten	歩数ノ名
Roede, maatstok	間棹 「ルーデ」ノ
Roede, zakere uitgestrektheid van 't land	掛リノ郷地
Roede, 't mannelijk lid	陰莖

Halma (1729) が 't と略しているのを桂川甫周編 (1858) が het に替えているのはよいとして計量に関わる2つの邦訳に誤訳がある。その1つは Roede, maat van twaalf Rijnlandsche voeten の voeten (英語の foot の複数の feet にあたる) を長さの意味で無く足の意味に取って「歩数ノ名」としていることである、正しくは【ラインランド州で使われている単位での12フィートの長さ】である。往時オランダでは地方によって voet (voeten の単数) の長さに差があった⁵。

もう1つは Roede, zakere uitgestrektheid van 't land を「掛リノ郷地」としていることだが、正しくは【面積の単位】である。

Webster (1858) では Rood に2つの見出し語がある、その1つは次のような面積と長さの意味である。

1. The fourth part of an acre, or forty square rods.
2. A pole; a measure of five yards; a rod or perch. [Not used in America, and probably local in England]

もう1つの見出し語は次のようである。

A cross or crucifix; a name formerly given to the figure of Christ on the cross erected in Roman Catholic churches. When complete, this was accompanied by the figures of the Virgin Mary and of St. John.

これはキリストの磔刑像のことであるが、オランダ語の roede にこの意味は無い。またオランダ語 roede は「罪人杯ヲ敲ク鞭、気條 梅杯ノ、間棹 「ルーデ」ノ、陰莖」も意味するが、英語の Rood にこれらの意味は無い。オランダ人は意味の違いは文脈から分かるので問題無いが、英単語に

⁵ ラインランドでは 1 voet は 31.40cm、アムステルダムでは 28.31cm、ロッテルダムでは 28.23cm であった。ちなみにイギリスとアメリカでは 1 foot (1 フィート) は 30.48cm である。

対応させた場合には注意が必要である。つまりオランダ語を単純に日本語に置き換えただけでは英和辞書が作れない好例である。そして堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の Rood の邦訳に混乱が見られないので、編集に関わった人々はこのことを承知していたと考えられる。

堀達之助編 (1862) および堀越亀之助編 (1866) の邦訳「尺度ノ名 英国ノ十六尺半ニ当ル」は註で英国の尺度に拠っておりオランダ語 roede に拠っていないのが分かる。また磔刑像に触れていないのは切支丹禁制を意識したためと考えられる。そして寸法だが広さではなく長さの意味だとしていて、その註で「英国ノ十六尺半ニ当ル」としているのは OED (2009) が長さの意味で “5½ yards or 16½ feet” だとしているのに符合する。

3.2 英語対オランダ語訳が 1:1 に対応していない計量関係語の概要

英語とそのオランダ語訳が意味的に 1:1 に対応しない計量に係る 25 語は次の通りである。

Bode, Cab, Chaldron, Gill, Hand, Metre, Nail, Ounce, Palm, Peck, Perch, Pole, Pottle, Pound, Quart, Scruple, Seam, Stoop, Tierce, Tod, Ton, Tun, Tunnage, Urn, Yard

英語対オランダ語訳が 1:1 に対応していない場合にはオランダ語訳と邦訳の検討は複雑であり、敢えて対応させようとするとう曖昧さが出てしまう。オランダ語訳との関係は避けて堀達之助編 (1862) から堀越亀之助編 (1866) への改訂状況について概要を述べる。なおこれらの英単語は日本語から見て多義なために、その邦訳には計量以外の意味も含まれるが、ここでは計量に関する邦訳のみを取上げて改訂状況を述べる。

1) 堀達之助編 (1862) の計量関係の邦訳を堀越亀之助編 (1866) が改訂しなかったケース 次の 15 語である。

Bode	尺ノ名
Cab	「ヘフリユウ」 ⁶ ノ量名
Chaldron	升ノ名 石炭杯ヲ計ル
Nail	尺度ノ名 凡ニ「トイム」半 ⁷
Palm	尺名
Peck	量目ノ名
Perch	五「ヤード」半ノ尺度
Pole	尺度ノ名 十六「フート」半ニ当ル
Pottle	升目ノ名 四「ピント」ニ当ル ⁸
Quart	量目 即「カルロン」四分一
Seam	量名
Stoop	升ノ名
Tierce	一「パイプ」ノ三分ノ一 升目ノ名

⁶ Cab の邦訳にある「ヘフリユウ」は Hebrew であり、現在では使われていないヘブライの乾量単位である。

⁷ Nail の邦訳「尺度ノ名 凡ニ「トイム」半」にある「トイム」はオランダ語 duim であり、幕末ではオランダからの外来語として通じたようだ。現在では英語のインチを使う。

⁸ Pottle のピントは液量単位である。

Tod 二十八「ポンド」ノ秤量
 Tunnage 船ノ「トン」數

2) 堀達之助編 (1862) の計量関係の邦訳を堀越龜之助編 (1866) が改訂したケース
 次の7語である。ここで左側が堀達之助編 (1862) の邦訳で、右側が堀越龜之助編 (1866) の邦訳である。

Hand	尺度ノ名	⇒	尺度ノ名 四「インチ」我三寸三分也
Ounce	量目ノ名 精量磅 十二分ノ一 粗量磅 十六分ノ一	⇒	量目ノ名 精量磅 十二分ノ一、 粗量磅 十六分ノ一、我七匁五分強
Pound	重サノ名	⇒	磅 英ノ一斤 輕斤ハ大凡我九十匁 重斤ハ我百匁
Scruple	量名	⇒	量名 廿ケレイン又ハ廿四ケレイン ⁹
Ton	升目ノ名 二千「ポンド」ニ当ル	⇒	噸 英 二千二百四十斤 或ハ二千斤
Tun	升目ノ名、量目ノ名	⇒	噸 二千二百四十斤
Yard	尺度 三尺餘リ	⇒	尺度 三尺

堀越龜之助編 (1866) のこれらの7語の邦訳の註がすべて日本の計量法と関連付けていて実用性が高まっている。それは英語の理解が深まったことの証しでもある。

3) 堀越龜之助編 (1866) が新たに計量関係の邦訳を付加したケース
 次の3語である。

Gill 升名 一ピントノ四分一¹⁰
 Metre 仏ノ尺度 我三尺強
 Urn 升目ノ名 「ローマ」ニテ酒ヲ量ル 英ノ三「ガルロン」半

上述したことを繰り返すが堀達之助編 (1862) の計量に関する邦訳が無いこれらの3語に堀越龜之助編 (1866) が計量の意味を付加していることから、計量に関する語の改訂に携わった柳川春三等はすべての見出し語に目を通していたのが分かる。

なお Urn は古代ローマの計量単位である。

3.3 計量関係用語の総括

1) 堀達之助編 (1862) の邦訳の桂川甫周編 (1858) との依存性

通説では堀達之助編 (1862) の邦訳は、底本である。Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳から桂川甫周編 (1858) から得たとされている。このことを計量に關係する語で検証する。

上述したように英語見出し語、そのオランダ語訳が 1:1 の關係にある計量關係の 22 のケースの内、堀達之助編 (1862) は英語 Gry に計量の意味がなく、そのオランダ語訳 niet について桂川甫周編 (1858) でも計量の意味が無いので、これを除いた 21 のケースで堀達之助編 (1862) と桂川甫周編 (1858) との關係をまとめると次のようである。

- ・堀達之助編 (1862) と桂川甫周編 (1858) の邦訳が表現を含めて同じ : 3 ケース

⁹ Scruple の邦訳にある「ケレイン」は質量單位 Grain であり、0.0648g に当たる。

¹⁰ Gill のピントは液量單位である。

Ell, Mile, Pint

- ・堀達之助編 (1862) と桂川甫周編 (1858) の邦訳が表現で異なる：6 ケース
Bushel, Hogshead, Inch, Kilogram, Rood, Troy-weight
- ・Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳が桂川甫周編 (1858) の見出し語に無い：12 ケース
Avoirdupois, Barleycorn, Carat, Coomb, Decempedal, Furlong, Gallon, Hundred-weight, Pennyweight, Quarter, Terce, Wey

これら 22 ケースの内の 19 ケースが桂川甫周編 (1858) から得た邦訳で無いことが分かった。となると同じに見える 3 ケースも桂川甫周編 (1858) に拠ったとは言いきれないのではないだろうか。つまり桂川甫周編 (1858) に拠らずに邦訳を得たが、それが桂川甫周編 (1858) の邦訳とたまたま意味的に同じだったということになるまいか。ともかく通説は見直しが迫られよう。

ところで、この桂川甫周編 (1858) が底本 Halma (1829) のオランダ語解説に拠らずに邦訳を得ているケースがある、改めて列記すると次のようにある。

Ell のオランダ語訳 el、Hogshead のオランダ語訳 okshoofd、
Inch のオランダ語訳 duim、Pint のオランダ語訳は同じ綴りで pint
蘭学者の学識の広さと深さが読み取れる。

そして英和辞書である堀達之助編 (1862) が見出し語の底本である Picard & Maatjes (1857) のオランダ語訳に拠っていないことを指摘しておく。

2). オランダ・英語圏・日本の計量法と邦訳語の関係

桂川甫周編 (1858)、堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866) のそれぞれで諸国の計量法が邦訳語の差に見えている。

2-1) 桂川甫周編 (1858) に見る計量法

上述したように英単語とそのオランダ語訳が 1 : 1 に対応しているのは 22 ケースであるが、その内で桂川甫周編 (1858) に採録されているのは 11 語である。この 11 語について桂川甫周編 (1858) の邦訳がオランダの計量法に拠っているものと日本の計量法に換算しているものがあり、さらに計量法を明示していないものと計量に関する語と理解していないケースに分類できる。次のようである。

- ・オランダの計量法に基づいた邦訳：2 ケース
Bushel のオランダ語訳 schepel、Kilogram のオランダ語訳 Ned. Pond
- ・日本の計量法に換算した邦訳：2 ケース
Ell のオランダ語訳 el、Inch のオランダ語訳 duim
- ・計量法に換算していない邦訳：3 ケース
Carat のオランダ語訳 karaat、Mile のオランダ語訳 mijl、Pint のオランダ語訳 Pint、
- ・計量に関する語と認識していない邦訳：4 ケース
Gry のオランダ語訳 niet、Hogshead のオランダ語訳 okshoofd、
Rood のオランダ語訳 roede、Troy-weight のオランダ語訳 goudewigt

なお当然だが英語圏の計量法に基づいた邦訳は無い。計量法に基づいていない邦訳 (5 ケース) は実用には供せないと思える。

2-2) 堀達之助編 (1862) に見る計量法

3.1 と 3.2 で述べたことをもとに計量に関係する 47 語についてまとめる。

- ・ 英語圏の計量法に基づいた邦訳：13 ケース
Decempedal, Hundred-weight, Ounce, Pennyweight, Perch, Pole, Quart, Rood, Terce, Tierce, Tod, Ton, Tunnage,
- ・ オランダの計量法に基づいた邦訳：3 ケース
Nail, Pottle, Quarter
- ・ 日本の計量法に基づいた邦訳：3 ケース
Ell, Inch, Yard
- ・ 計量法に換算していない邦訳：24 ケース
Avoirdupoids, Barleycorn, Bode, Bushel, Cab, Carat, Chaldron, Coomb, Furlong, Gallon, Hand, Hogshead, Kilogram, Mile, Palm, Peck, Pint, Pound, Scruple, Seam, Stoop, Troy-weight, Tun, Wey
- ・ 計量に関する語と認識していない邦訳：4 ケース
Gill, Gry, Metre, Urn

堀達之助編 (1862) は英語圏の計量法に基づいた邦訳が 13 ケースとオランダの計量法に拠る邦訳が 3 ケースあり合せて外国の計量法に拠る邦訳が 16 ケースになる。桂川甫周編 (1858) ではオランダに拠るのが 2 ケースだけであるから、堀達之助編 (1862) は桂川甫周編 (1858) よりも外国の計量法についての理解が進んでいる。このことから通説とは違って計量に関する語に関しては堀達之助編 (1862) は桂川甫周編 (1858) に依存しているとは言えないし、その典拠は蘭学書でなく英学書だと考えられる。

2-3) 堀越亀之助編 (1866) に見る計量法

3.1 と 3.2 で述べたことをもとに計量に関係する 47 語についてまとめると次のようである。

- ・ 英語圏の計量法に基づいた邦訳：17 ケース
Decempedal, Furlong, Gry, Hand, Hogshead, Hundred-weight, Kilogram, Ounce, Pennyweight, Perch, Pole, Quart, Rood, Scruple, Tierce, Tunnage, Urn
- ・ オランダの計量法に基づいた邦訳：4 ケース
Gill, Nail, Pottle, Quarter,
- ・ 日本の計量法に基づいた邦訳：13 ケース
Avoirdupoids, Bushel, Coomb, Ell, Gallon, Inch, Metre, Mile, Pound, Terce, Tun, Wey, Yard
- ・ 計量法に換算していない邦訳：13 ケース
Barleycorn, Bode, Cab, Carat, Chaldron, Palm, Peck, Pint, Seam, Stoop, Tod, Ton, Troy-weight,

堀達之助編 (1862) では日本の計量法に基づいた邦訳は 3 ケースであるが、堀越亀之助編

(1866) では 13 ケースへと大幅に増えており実用性が高まっている。

2-4). 堀達之助編 (1862) から堀越亀之助編 (1866) への改訂量

3.1 と 3.2 で述べたように堀達之助編 (1862) から堀越亀之助編 (1866) で邦訳が改訂されたのは次の 23 語である。

Avoiddupoids, Bushel, Coomb, Ell, Furlong, Gallon, Gill, Gry, Hand, Hogshead, Inch, Kilogram, Metre, Mile, Ounce, Pound, Scruple, Terce, Ton, Tun, Urn, Wey, Yard

このように計量に関する語は 47 語の内の 23 語が改訂されており、比率では 49%である。

堀達之助編 (1862) から堀越亀之助編 (1866) への改訂は全体として平均して 1 ページ当たり 7.8 語であることを筆者が明らかにした (三好彰 2014)。1 ページ当たりの見出し語数は 38 なので改訂量は平均で 20%である。ところが計量関係語の改訂比率の 49%は平均値の 2 倍以上の高さである。堀越亀之助編 (1866) の計量関係の語を見直した柳川春三等の見識の高さがうかがえる。

この 23 語の中に堀達之助編 (1862) が計量に関係する邦訳を与えていないが、堀越亀之助編 (1866) が計量の意味を付加したのが 4 語(Gill, Gry, Metre, Urn)ある。柳川春三等はすべての見出し語に改訂の手を延ばしたわけである。

2-5). 国や物によって異なる単位

上述したように国や物によって異なる単位がある。まとめると次のようである。

- ・オランダと英米で差がある単位 : Bushel, Carat, Decempeda, Ell, Gallon, Hogshead, Inch, Mile, Pole, Rood
- ・イギリスとアメリカで差がある単位 : Bushel, Coomb, Gallon, Hogshead, Hundred-weight, Pint, Pound, Quarter, Terce
- ・物によって異なる単位 : Carat, Wey

日本には欧米とは異なる尺貫法がある。欧米の計量法を尺貫法に換算した。

ところでこのような計量の単位の差は諸国の歴史的な背景によるものであり、国際的な交流や貿易では支障が生ずる。それを解決するためにメートル原器やキログラム原器が作られて国際的な標準化がなされたのは、1889 年の第一回国際度量衡総会であった。『英和对訳袖珍辞書』が刊行されてから四半世紀経ってのことである。

2-6) 古い言葉

古代ヘブライの計量単位に拠った Cab と古代ローマ時代の計量単位に拠った Urn が Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) と『英和对訳袖珍辞書』 (堀達之助編 (1862) と堀越亀之助編 (1866)) に採録されている。

また、OED (2009) や Webster (1858) が Obsolete, Rare, Old, Abolished, Locally used などとしている語が次のようにある。

Coomb, Ell, Gry, Perch, Pottle, Quarter, Rood, Terce, Tierce, Tod

これらの語で言葉や計量法の歴史を学ぶことができる。それが Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) の狙いだったかもしれない。

4. まとめ

『英和对訳袖珍辞書』に出ている計量関係の邦訳語を英語とオランダ語の両方から考察した。

欧米（オランダ、イギリス、アメリカ）諸国間でも計量の考え方が異なっている。とりわけ日本には尺貫法があって欧米との差が歴然とある。

英語とオランダ語は西ゲルマン語に属している関係で計量関係の単語に近縁のものがあるが、その意味に地方による差があることもある。計量関係の語においてはその差は小さくても実用上問題になる。

同じ英語圏であるイギリスとアメリカで同じ綴りの計量関係の語で、その大きさに差があることを処々で述べたが、堀達之助編（1862）と堀越亀之助編（1866）はその違いに言及していないので認識できていたかどうか疑問が残る。今後の課題とする。

このような問題があるために、計量値を相互に換算することは一筋縄にはいかない。これは英和辞書や蘭和辞書などの対訳辞書に付いて回る避けて通れない問題である。その問題点を個々のケースで明らかにすることができた。そして英語からオランダ語訳を介しての単純な言葉の置き換えでは邦訳が得られないことがある。

また計量法の変遷には長い歴史があり、それが言葉に残っている。堀達之助編（1862）の底本である Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) に古い言葉が少なからず採録されているのは、オランダの生徒に歴史を学ばせようとした底本原本の編纂者 H. Picard の意図だったかもしれない。

参考文献

Historische woordenboeken op internet (『オランダ古語辞書』)

<http://gtb.inl.nl/openlaszlo/my-apps/GTB/Productie/HuidigeVersie/src/index.html?owner=WNT>

堀達之助編（1862）『英和对訳袖珍辞書』江戸：洋書調所

堀越亀之助編（1866）『改正増補 英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所

岩崎克己（1935）『柴田正吉傳』東京：一誠堂書店

桂川甫周編（1858）『和蘭字彙』安政5年[1858]跋 江戸日本橋通：山城屋佐兵衛。

古賀十二郎（1947）『徳川時代に於ける長崎の英語研究』福岡市：九州書房

松田清（1984）「『ドーフ・ハルマ』初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照」『海南手帖』2: 1-25, 高知：高知大学仏文研究室

三好彰（2008）「『英和对訳袖珍辞書』の底本の編纂者 H. Picard」『英学史研究』41:57-67

三好彰（2010）「袖珍サイズの英和对訳袖珍辞書」『日本古書通信』Vol. 75, No. 10 : 4-7

三好彰（2013）「宮崎元立と英学（続々）—生麦事件と『英吉利文範』を中心に—」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター 研究紀要』7:23-37

三好彰（2014）「改正増補『英和对訳袖珍辞書』の手稿をもとにした編纂方法の考察」『洋学史研究』31:61-84

OED (2009) *Oxford English Dictionary, Second edition on CD-ROM Version 4.0*, New York; Oxford University Press

- Picard, H. (1843) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages: remodeled and corrected from the best authorities*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages, 2nd ed., rev. and augm. by, A.B. Maatjes*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- Webster, Noah (1858) *An American dictionary of the English language; containing the whole vocabulary of the first edition in two volumes quarto; the entire corrections and improvements of the second edition in two volumes royal octavo; to which is prefixed an introductory dissertation on the origin, history, and connection, of the languages of western Asia and Europe, with an explanation of the principles on which languages are formed.*, Springfield, Mass., G. and C. Merriam

Some Considerations on Translated Japanese Words of Measurement Related Words in the First Commercial English-Japanese Dictionary Published in 1862

Akira Miyoshi

Keywords: The Commercial English-Japanese dictionary and the Dutch-Japanese Dictionary in the Edo Period in Japan, Measurement Related Words in Bilingual Dictionaries

The "Eiwa-Taiyaku-Shuchin-Jisho", published in 1862, is the first commercial English-Japanese dictionary in Japan. Since its entry words were taken from Picard & Maatjes's English-Dutch dictionary published in the Netherlands, 1857, it is widely believed that translated Japanese words were easily taken from the Dutch-Japanese dictionary, which was available then, using the translated Dutch words of the English-Dutch dictionary.

However, the present author assumes that it might not be so simple, because English, Dutch and Japanese languages have unique linguistic properties. To verify the assumption, all words related to measurements in the "Eiwa-Taiyaku-Shuchin-Jisho" are inspected in view of the different measurement methods used in Holland, Britain, the United States and Japan. Notably Japan has her own original system of measuring length by the shaku and weight by the kan. Therefore translated Japanese words should be generally expressed in the Japanese measurements.

Since both English and Dutch belong to the Indo-European language family, their vocabularies are closely related, but in some cases there are small differences in meaning, especially in words related to measurement, such as English *pound* (453.6g) vs Dutch *pond* (500g). Small differences in meaning between such similar words might cause problems in daily life as well as in business.

The present author makes it clear, on his precise analysis, that words relating to measurement have been largely revised with better understanding of these problems in the 2nd edition of "Eiwa-Taiyaku-Shuchin-Jisho" published in 1866.

(みよし あきら)